

# ホロコースト下のユダヤ人の子どもたち

—オランダを中心に—

Jewish Children Under the Holocaust

— Led by the Netherlands —

青島 有里

(Yuri AOSHIMA)

## はじめに

今回、私がこのテーマに興味を持ったきっかけは、女優のオードリー・ヘップバーンである。ヘップバーンは、1929年5月4日にベルギーのブリュッセルで生まれ、両親の離婚後は母の故郷であるオランダへ移住していた。彼女の少女時代にはある意外な一面がある。それは第二次世界大戦のオランダで反ナチスのレジスタンス活動に協力していたという事実だ。

『アンネの日記』で有名なアンネ・フランクもまた、ヘップバーンと同年代であり、当時オランダで生活していた女性である。彼女はユダヤ人であったため、アムステルダム隠れ家で潜伏生活をし、その中で、彼女は何人かの親切な非ユダヤ人の協力を得ることでおよそ2年もの間生き延びることが出来た。彼女が潜伏生活中に綴った日記は、オランダで、ある一人のユダヤ人少女が送った悲劇と成長、人種差別や戦争を人々に訴えており、今なお世界中で多くの人々に読まれ続けている。

一方、このそのオランダという国では、オードリー・ヘップバーンやアンネ・フランク、そして、かつてのオランダで黄金時代の海外貿易で基盤となっていた多様な価値観を認める「寛容の国」という国のイメージと異なっており、第二次世界大戦におけるユダヤ人の犠牲者数はヨーロッパ西部地域でドイツの占領下になった国々の中では最も多いという驚くべき事実がある。

さらにアンネのような生活が、当時のユダヤ人の子どもたちがホロコースト下で送っていた生活の典型的なモデルとは言い切れないこと、その生活が実は多種多様であったことも知った。事実、アンネの日記に記されている生活の様子は隠れ家に住んでいた時までであり、ゲットーやホロコーストの様子までは書かれていない。つまりこのような事から、アンネの日記だけでは把握できなかった当時のユダヤ人の子どもたちの生活について深く興味を持ち、今回研究してみようという結論に至った。

## 1. オランダとユダヤ人

### 1. 戦間期のオランダとユダヤ人

オランダは伝統的に中立政策を維持してきた国であった。1914年～1918年の第一次世界対

戦の間もオランダは中立国という立場をとり、オランダが戦場になることは無かった。

第一次世界対戦後はオランダに繁栄が訪れ、オランダは西インド諸島の植民地からのコブラ（ココヤシの果実の胚乳を乾燥させたもの）やサトウキビなどの半製品輸入で活性化した。アムステルダム的人口は、1900年に50万であったが、1925年に70万人になった。<sup>1)</sup>

オランダ社会におけるユダヤ人の立場について言えることは2つある。1つ目は、オランダ・ユダヤ人はオランダ特有の「柱状社会構造」の中でオランダ人社会の他の領域からは別個の集団として保ち続けていたということだ。1930年代のオランダ・ユダヤ人は（中略）オランダ社会に同化していた傾向があったが、実際には1941年までにアムステルダムのユダヤ人で洗礼を受けたのは、1パーセントに満たず（7万9400人のうち500人）、混合婚、すなわちカトリックもしくはプロテスタントを結婚相手に選んだユダヤ人は17パーセントほどに過ぎなかったという。<sup>2)</sup> 大部分のオランダ・ユダヤ人は改宗するには至らず、依然としてユダヤ教特有の伝統の範囲内で行動していた。そのため1930年代のオランダ社会では、誰がユダヤ人かユダヤ人でないか判別することはできた。2つ目はオランダではあからさまな反ユダヤ主義の水準が比較的低かったということである。これはオランダ国内における他宗教に対する「寛容文化」によるものだろう。

## 2. ドイツ軍占領下のオランダ

第二次世界大戦は1939年9月にドイツのポーランド侵入によりイギリスとフランスがドイツへの宣戦布告したことで始まった。オランダは中立国を宣言したが、5月15日にはドイツ軍はアムステルダムを占領した。

1940年から1941年にかけて、オランダにおける「完全」ユダヤ人（ユダヤ人の両親を持つ者）の数は総計14万人に達し、オランダ総人口890万人のうちの1.6パーセントを占めていた。またオランダ・ユダヤ人全体の53パーセントにあたる7万5000人が、当時アムステルダムに住んでいた。14万人の「完全」ユダヤ人のうち約1万5000人（11パーセント）がドイツ・ユダヤ人、約7000人（5パーセント）が「その他」の範疇に入り、残りのほとんどは東欧系ユダヤ人であった。<sup>3)</sup>

しかしオランダでは徹底的にユダヤ人狩りが行われ、オランダからはおよそ10万7000人のユダヤ人が東部に移送されたが、戦後帰還できたのは、たった5450人だけであったという。<sup>4)</sup>

オランダ国内でこれだけの犠牲者数が出た理由には三つ考えられる。一つ目は、ナチス行政機関によるオランダ公務員のアーリア化だ。ユダヤ人の割り出しは、ドイツ軍占領後の6月末の労働省の発表から始まった。失業中のオランダ人男性はドイツで仕事に就くために全員登録するよう発表した。同時に、ナチ体制はすべてのオランダ人公務員にユダヤ人女性と結婚しているのか、またユダヤ人なのかどうか申告させる書類に記入するよう命じている。その後、ユダヤ人の市役職員・教師などは解雇された。二つ目は、非ユダヤ人のオランダ公務員がナチス・ドイツ側の要求に応えるべく便宜を図ってきたという事実だ。それにはオランダ人官僚や

ーコプ・レンツの例があげられる。ユダヤ人を割り出すためには誰がユダヤ人で誰が非ユダヤ人であるか証明する必要があるが、彼の考案したIDカード（身分証明書）は2枚の写真添付や2組の指紋、ユダヤ人の身分証明書には「J」のスタンプが押され、すべて透かしの入った紙に特別のインクで書くというものであった。これは偽造が困難なものであり、職務上要求されたもの以上のものであった。彼は積極的・且つ野心的にこのIDカードの作成に取り組んだが、これは後々ユダヤ人たちが身元を偽るのに困難となる原因の一つとなった。彼の行動がユダヤ人虐殺に貢献したことは間違いない。三つ目は、ユダヤ人評議会が例として挙げられるように、ユダヤ人が自ら破滅の道を進んでしまったことだ。ユダヤ人評議会とは、ナチス行政組織公認のユダヤ人によるユダヤ人のための組織のようなものである。1942年にはオランダ警察がユダヤ人検挙のための行動を強制させられる。このユダヤ人狩りには評議会の存在が大きく関わっていた。彼らは強制移送の免除者のグループを決めていた。これらのグループのなかで最大部分を占めるのは、ユダヤ人評議会の職員とその家族、医療関係者、薬剤師、理髪師、パン屋、ユダヤ社会用の店の所有者たちであった。1942年12月、その数は1万7000人であった。第二のグループは混合婚のユダヤ人で（中略）、実際には8、9千人であった。多くの場合キリスト教徒と結婚している改宗者も延期された。彼らは1500人以上いた。しかし1943年になると強制移住を免除されていた評議会のメンバーも汽車で収容所送りとなってしまふ。<sup>5)</sup>この頃には既にオランダにいたユダヤ人たちはほとんど全員、収容所送りになっていたか潜伏生活に入っていた。つまり、本来はユダヤ人によるユダヤ人のための存在だったユダヤ人評議会は、自ら強制移送のグループを決めてしまうことで誰がユダヤ人かユダヤ人でないかをナチス側に暗に伝えてしまっていたのだ。またユダヤ人評議会に限らず、当時のその他ユダヤ人全員に言える事が一つある。それは当時オランダが占領下という状況下にも関わらず、14万人ものユダヤ人が自ら進んで名簿作りに参加した事自体が実に奇妙であるという事だ。それについて「当時のユダヤ人は、ドイツ軍はお金がなくて「新しい税金の取り立て」のための名簿づくりだろうと考えて、それに応じた<sup>6)</sup>」という意見がある。

### 3. アンネ・フランクの場合

アンネ・フランクは、1929年6月12日に「フランク銀行」を経営する父と母の元にドイツで生まれ、1934年2月に家族と共にオランダに逃れてきた。彼女は1942年7月6日から親切的な非ユダヤ・オランダ人に援助をうけ、およそ2年間隠れ家で生き延びた。隠れ家にはフランク一家の他に、ヘルマン家の3人と歯医者フリッツ・ベッファー、計8名で潜伏生活をしてきた。生活の収入源は無く、それぞれ一家の貯金を切り崩して生活をしてきた。隠れ家では何もすること無いため、彼女は読書や語学を学ぶことを楽しみとしていた。

アンネ・フランクの一家はなぜオランダという国を選んだのか。なぜ父オットーの友人のいるアメリカや親戚のいるイギリスに行かなかったのか。それは他のドイツ・ユダヤ人難民と同様にオランダがドイツから地理的に近かったことやドイツ語とオランダ語の言語的な近さから

すぐ馴染むことが出来ると考えたためである。また、「実家から離れたくない」というアンネの母の意向がかなり影響していたと考えられる。<sup>7)</sup>

しかし1944年8月4日、一家はついに見つかって連行されてしまう。アンネたちは密告されたのだが、密告者は現在も明らかになっていない。アンネは1942年に6月12日の誕生日から連行される3日前までずっと日記を記していた。

## Ⅱ. 潜伏していた子どもたち

### 1. 里親システムについて

子どもたちは、抵抗運動組織や友人などのネットワークによって、新たな潜伏場所となる家族を見つけられた。そして子どもたちの大半は両親から引き離された。(中略) 一網打尽が避けられるだけでなく、匿う人数が増えれば衣食住の必要や危険性もそれだけ増すので、匿う人々にとってもそのほうが負担が軽い。それに子供のほうが親よりも匿いやすいということもあった。幼い子供は書類をいろいろ揃える必要がないし、年長の子にしても、おとなに比べれば官憲の追及はゆるい。また、疎開してきている身内の子だとか、戦災孤児だと言って身元をごまかすこともできた。こうして慎重に考え抜かれた結果、多くの子供が家族と離れて暮らすことになった。<sup>8)</sup>

ユダヤ人を救出し、かくまうことに活動の目的を絞っていた組織がオランダにはいくつかあった。例えば、アムステルダムの学生グループ、ユトレヒト児童委員会、あるいは株式会社(NV)といったいくつかの組織は、もっぱらユダヤ人の子供達を救うことに焦点を合わせていた。これらの組織のうち最初の二つは、大学の学生達から構成されていた。そして彼らの憤りを勇気ある危険な活動に変えることを可能にしていたものは、一つには彼らの若さであった。<sup>9)</sup> オランダで潜伏生活を経験したエト・ファン・ティンはマレク・アルテールとの会話で次のように述べている。

「ご存じでしょうが、私には18人の母と18人の父がおります！戦争中、18ヶ所にかくまわれていましたからね。彼らはプロテスタント、無宗教の者、カトリック教徒といろいろでしたが、それは彼らが若い人びとのグループに属していたからです。」

「それは何という組織でしたか？」

「いや……、『名前のない組織』でした。つまり株式会社みたいなものですね。」<sup>10)</sup>

里親となってもらう家族には、毎月お金が支払われていたケースがあることが分かっている。お金は子供の両親か抵抗組織のどちらかから受け取っていたようだ。

アンネ・フランクのクラスメートであったテオ・コステルは、両親が自分を匿ってくれていたファン・ベーク夫妻にお金を払って自分を預かってもらっていたことを、戦後知った。金額は一ヶ月につき65ギルダー（現在の価値では約390ドル）だ。<sup>11)</sup> 彼の実母は見た目がユダヤ人

らしくなく、また偽の身分証明書を所持していたため、わりと自由に動くことが出来た。そのため彼の場合は、抵抗組織を介さず両親から里親へ直接支払われていたと思われる。彼は比較的自由な生活を送ることが出来ており、匿ってくれた夫妻について、彼らはお金をもらわなくても喜んで預かり、自分の子供のように受け入れていただろうと述べている。

## 2. 戦時中の潜伏生活

オランダにおいてのユダヤ人の子どもたちの潜伏生活は2種類に分けることができる。

一つ目は、「秘密裡」に行われるもので、外部に自分達の存在を知られないように潜伏するタイプである。アンネ・フランク一家もこのタイプだ。このタイプの場合は特定の家族に匿ってもらうのが基本だった。そして自分達の存在を知られるわけにはいかないので家の中に閉じこもるのが常だった。その場所はさまざまにアンネ・フランク一家のように立派な隠れ家で潜伏できる場合もあれば、潜伏した家によっては普段から家具の下でじっとしなければならぬ場合もあった。ある少年の場合は、膨大な時間を食器棚の中、流し台の下、そして地下室や屋根裏部屋で過ごした。そのため戦後、彼は言うことは出来たが、歩いたり話したりすることは出来なかった。何故なら、これらの窮屈な生活環境が彼の成長のための力を妨げたからである。

二つ目は「溶け込んだ潜伏」と呼ばれるもので、子どもたちが新たな帰属意識を持ち、家族や共同体にまるで本当の家族の一員のように堂々と溶け込むタイプである。新たな帰属意識とは、子どもたちに偽の記憶や経歴・物語を設定することである。そのため子どもたちはこれまでの過去や記憶を捨て、名前をオランダ風に改名し、外で何か聞かれても何も答えてはいけぬなど、新しい家族の下のルールに従うようになった。

子どもたちの見た目は潜伏生活をする上で重要な要素の一つだった。例えばヨーゼフという少年の場合は、彼の目の形などから幾分アジア人のような顔立ちをしていた。そのため彼と彼の妹を一時的に引き取った男性は、6歳のヨーゼフがアジア人との混血として通用すると考え、中国人の母親とオランダ人の父親の間に生まれたインドネシア人という物語を作り上げたのであった。<sup>12)</sup> また、ある姉妹の場合は姉と妹でその容姿の特徴に違いがあったため、その行動範囲が大きく異なっていた。姉はユダヤ人特有の黒髪だったため家の外に出ることは禁じられていたが、妹は金髪に青い目だったので屋外に自由に出ることを許されていたという。

これらの潜伏生活をするために当時のオランダではかなりの努力が必要であった。オランダの地理的な条件に加え（オランダは、東部はドイツ、南部は占領されたベルギー、そして西部および北部は開かれた海と接している。またオランダ自体は平地の国であるため、海岸地域の湿地帯を除けば森もなく他の隠れ場所もない地域だった）、1940年5月15日にオランダ軍がドイツ軍に降伏している事実があった。

また、全ての子どもたちが充実した潜伏生活を送れたわけではなかった。裕福な家に迎えられ悠々とした生活が出来た子がいれば、貧しい家で召使いのように働かされる子どももいた。

愛情面においては、子どもがいなかったことから温かく迎えてくれるオランダ人家庭もあれば、お金のためだけに迎えた家庭もあった。

ミリアムは1943年、12歳になったばかりの時に、ハーグに住む子供のいない中産階級の夫婦のもとに引き取られた。近隣にはその家の女主人のゼーラント州から来たという触れ込みだった。「ゼーラントは昔スペインから移ってきた人が多いところなので、そうしたのです（ユダヤ的風貌を偽るための口実としたのである）。夜には外出もしていたし、私がいることは周知のことでした。けれども半年ほどすると、ユダヤ人ではないかと疑う人が出てきたので、それからは外に出るのをやめました。つまり、ここにはいない、行ってしまったということにして、隠れ潜んだのです。（略）」しかし、「消え去った」あとも生活はあまり変わりなかった。レヴィがいた「おばさま」と「おじさま」（レヴィは里親をこう呼んでいた）は匿うことを引き受け、責任を果たしつつけたが、「宗教に凝り固まった、とても厳格で堅苦しい」人々だった。細やかな情愛とはおよそ縁遠く、ミリアムを一人で放っておいた。（中略）しかし、ミリアムはフリースラント州の小さな村に移り、二人の小さな子供がいる小学校の教師とその妻の家で暮らすことになった。「幸せでした！あの嬉しさはとてもわかってもらえないでしょう。<sup>13)</sup>」彼女のそこでの生活は、完全に自由で、学校へ行くこともできた。また今度の養母は、大きな女の子が出来たのを喜んで家事や編み物を教えてくれたり、そして何より彼女を愛してくれていたようだ。

ルイ・Gは、13歳の時にある隠れ家から他の隠れ家に移された。共産主義者で労働階級の家庭だった。ルイの両親は、彼の部屋代と食事代を彼らに支払っていたが、その一家には現金がもっと必要だった。その結果、彼の両親には知らせずに、彼らはルイに封筒作りをさせた。ルイは一日中何もしないで家にいたからである（封筒作りは、当時のオランダの刑務所で服役していた囚人用の、出来高払いの作業種目だった）。彼は冬の間、暖房のない小さな部屋を与えられ、家族の食べ残しだけで作られた夕食を出される前に、約200通の封筒を作らなければならなかった。（中略）しかし、養母は彼の部屋代と食事代を集金しに行った際に、ルイの両親が自分を親切な人間だと思いうように、バターと砂糖を持っていった。ルイの父親は息子の素行を正すために彼を訪ねようと決めたが、この女性が現金を受け取っておきながら、息子にはろくな食事を与えず、まるで囚人のようにこき使っていようとは夢にも思っていなかった。（中略）しかしながら、両親は彼の言うことを信じ始め、息子のために別の隠れ家を見つけた。<sup>14)</sup>

### 3. 戦後の子どもたち

アムステルダムに住んでいた8万人のユダヤ人のうち、1945年の解放の時には5000人が生き残っているだけだった。<sup>15)</sup> 戦争を生き延びたユダヤ人の子供達は3500人とも見積もられているが、そのうち1417人は生き残った両親もしくは片方の親との再会を果たした。ヨーゼフ・ミフマンの報告によれば、1540人の子供達が少なくともどちらかの親に引き取られたという。2041人は完全な孤児で、そのうちおよそ1300人は15歳以下だった。<sup>16)</sup> そして、このような子

どもたちにとっての問題は「私の戦争は戦後始まった」というのが共通のリフレインであったようだ。

戦後の子どもたちの生活の違いは、大きく分けると両親が「生還した場合」と「生還しなかった」場合に分けられる。まず両親が「生還した場合」についてだ。匿っていた家族は、子どもたちの実の両親が戻ってきた場合は喜んで譲り渡す傾向があったが、中には子どもを手放そうとしない家族もあった。実際に戦後実の両親から親権を奪った家庭もあった。子どもたちの反応も様々で、喜んで親元に戻る子どもがいれば、実際親元に戻ったら親が戦前と別人になってしまっておりその生活にもショックを受けた子どももいた。また子どもたちの中には片親だけが生還した場合、さらにその片親が再婚した場合と再婚しなかった場合で異なる。片親が再婚した場合は、子どもたちにとって最も平穏な生活を送ることが出来たが、片親が再婚した場合は、義理の兄弟や継母といった人の出現により居心地の悪さを感じてしまう子が大半だった。

マックス・Lの場合は、戦争が終わって3年後、12歳になるまで里親の元にいた。里親が彼を手放そうとしなかったからである。彼は実の父親と継母と生活するようになったが、彼は温もりと愛情にあふれた里親の家に戻りたかった。そして14歳の時に継母は彼に性的な関係を迫るようになった。これは苛酷な身体的懲罰を伴いながら数年間続いた。

次に戦争終結時に孤児だった場合だ。この場合は5つのパターンに分かれた。一つ目は自分を匿ってくれた里親一家と一緒に暮らす。二つ目は同じユダヤ人の親戚に引き取られる。三つ目は親類ではないユダヤ人の家庭で暮らす。四つ目は孤児院に入る。そして五つ目はイスラエルへ行くことだ。里親一家と一緒に暮らした場合は比較的良好だったが、同じユダヤ人に引き取られた場合は子どもたちにとっては新たなトラウマを生む原因となったケースが多い。なぜならば自分達が継子であるような気持ちになってしまった事、また同じユダヤ人という立場であり、引き取ってくれた彼らも戦争の被害者でもあったからだ。孤児院に入った場合は様々であったが、潜伏生活中、家庭に問題があった子どもは孤児院の生活に入ることによって安心感を覚えたり、同じ境遇を経てきた子どもたちと共感し前向きな気持ちになる子どもたちもいた。

さきほど登場したルイ・Gは、戦後孤児となり、その後パレスチナに赴いた。彼はアムステルダム孤児院出身の青年などと共に活躍した。その後幾度が戦争を経験するようになり、朝鮮戦争の期間中、彼はアメリカ合衆国へ移住する機会を得、21歳の時にそれを実行した。(中略)彼は最終的にコロンビア大学から経済学の学位をもらい、大学院で勉強したが、博士号を取得するところまではいかなかった。とはいえ、彼はいい職に就くことができたし、彼の家族もしっかり養っていた。<sup>17)</sup>

これらのオランダにおけるユダヤ人の子どもたちの戦時中と戦後の経験は、彼らが子どもだからこそ起こる問題を含んでいたことが分かった。抵抗運動組織の活動家や両親、匿ってくれた里親一家からは、子どもは大人に比べて匿いやすいと思われていたが、同時に愛情や健やかに成長するための生活環境など子どもたちの年齢で求められていたものがあつた。そしてオラ

ンダで、家族が離ればなれで潜伏していた多くのユダヤ人一家と異なり、アンネ・フランク一家のように一家全員が一緒に潜伏生活をしていたことは非常に稀なケースだったのだろうと考えられる。

### Ⅲ. 各国のホロコースト体験

#### 1. ゲットーを体験した子どもたち

他国のユダヤ人の子どもたちの中にはアンネ・フランクのように当時の日記をつけていたり、死後その日記の存在が確認されている子どもたちがいる。

モシェ・フリンカーは、ナチスがオランダのユダヤ人を収容所に送り込みはじめた1942年に、家族とともにハーグ市から逃げ出した。彼の一家はベルギーのブリュッセルで秘密裡に生活をしてきたが1943年2月以降、彼は他のユダヤ人への苦難への同情と安全な生活を送る自分への後ろめたさ、ユダヤ人としての祖国であるイスラエルへの憧れを日記に綴っている。また、この日記を書いている当時はまだ生活に余裕があったのか、ユダヤ図書館へ行ったことや父の勧めでタイプと速記を習うため教習所へ通ったことが記述されている。一方、教習所で名前を聞かれた際に躊躇したという心境も述べている。彼は、1944年の過ぎ越しの祭り（ユダヤ人がエジプトで隷属から解放されたことを記念し、毎年行う祭り）の前夜に一家全員と共にアウシュヴィッツに送られた。モシェと両親は殺されたが、他の兄弟は生還したという。

メアリ・バーグは、ナチスがポーランドを占領したとき、両親とともにポーランドのウーチ市に住んでいた。母親は非ユダヤ人であり、そのうえアメリカの市民権を持っていたが、一年後、一家はワルシャワ・ゲットーに入れられた。彼女の日記には、ナチスから逃れるため各地を転々とした様子、ゲットー（ユダヤ人街）に入れられた後は、難民たちが次々と飢えやチフスで死亡者が増加していたこと、またユダヤ人でありながらスパイがいたことなどが客観的に記されている。彼女の一家の場合は最終的にドイツ人捕虜と交換するため拘束を解くという連絡が入り、1944年3月5日にフランスのリズボンで捕虜交換され、アメリカに渡ることを許可されることで無事生き延びた。彼女は1940年4月28日の日記と1942年12月26日の日記で次のように記している。

「これまでほかの家族と共同で使っていたアパートの一室をようやくわたしたち一家だけで使えるようになった。母は、そのドアに『アメリカ市民』と添え書きした自分の名刺を張りつけた。この名刺は、どの部屋にも勝手に踏み込んでくるドイツの強盗に対してすばらしい効き目があった。<sup>18)</sup>」

「ここを去る日もほんとうに間近になったようだ。ナチスはわたしたちによい印象を植えつけようと躍りになっている。クリスマスの前日、被抑留者の宿舎が（ユダヤ人の部屋までも）きれいにみがかれた。クリスマス当日は特別なごちそうが出た。<sup>19)</sup>」

これらは彼女の母親がアメリカの市民権を持つ非ユダヤ人といういわゆる「混合婚」による

子どものケースだったため、このような特殊な措置をなされたということがよく分かる回想である。

## 2. 収容所を体験した子どもたち

アナ・ノヴァク（本名ジムラ・ハルシャーニ）は、トランシルヴァニア（現ルーマニア）出身のハンガリー系ユダヤ人で「ルーマニアのアンネ・フランク」としてフランスで知られている。彼女はナチスドイツがハンガリーに進駐した1944年にアウシュヴィッツ強制収容所に送られた。ノヴァクに注目したい理由は二つある。一つ目は彼女がアンネと同生まれの14歳であること。二つ目は彼女の日記がアンネ・フランクと異なり、隠れ家ではなく収容所で綴られていたという点だ。彼女はアウシュヴィッツを初めとした4箇所の収容所の中でこの日記を母親に手紙として書いている。ノヴァクの日記では、アンネが一人の人間として成長する様子とは異なり、収容所の中の生々しい光景や女性囚人の狡猾な様子や生きることへの執念が書かれている。

ルート・クリューガーは、1931年にオーストリアのウィーンで生まれた。彼女は10歳の時に強制収容所に母と共に移送された。実の父親は母と自分を見捨ててイタリアに逃亡、母はそのことからルートに対して八つ当たりをしたため、彼女は母に対してトラウマを抱えるようになった。しかし、強制収容所に入った際、母の印象を変えるある出来事が起きた。

それは「選別」の際に起こった。「選別」とは、15歳以上の年齢に達していない者はガス室送りになるものだった。しかし収容所にいるユダヤ人たちには知らされていなかった。ルートの母は一度目の審査では正直な年齢を答えて失格だったルートに、「15歳と偽ってでもいいから申請してきなさい」と強く勧めた。しかし当時まだ12歳だったルートは乗り気ではなかったのでルートの母はさらに強く勧めた。彼女はこう述べている。

「母はこの絶滅収容所でははじめから判断をあやまらなかった。ここでなにが演じられているかを即座に悟ったからこそ、着いてすぐ、自殺しようともちかけたのだった。そしてわたしが拒むと、彼女は選別という唯一の逃げ道に気がついた。<sup>20)</sup>」

その後彼女は列に並んでいる時、持ち場を離れた記録係の女性に「何歳であるか」と小声で声をかけられた。ルートが「13」と答えると女性は彼女に「15って言いなさい」と忠告した。その女性はルートがSS隊員に不思議がられた際にもすかさずフォローを入れ、結果、ルートはガス室送りにならないですんだ。ルートと母はその後も強制収容所を生き延び、死の行進の途上、共に脱走し、戦後はドイツとアメリカで過ごした。

この体験は、ユダヤ人の子どもが親と共に収容所で体験したことが分かる貴重なものであり、そのメリットとデメリットを伺える。子どもたちは親と共に過ごすことで親の嫌な面を見てしまったが、収容所では親の助言があったからこそ彼女は生き延びることが出来た。またこの収容所の体験から分かることがもう一つある。それは、収容所の段階になると、徹底的に世間から目立たせまいという潜伏生活とは異なり、行動力のみが生き残るための手段であったと

いうことだ。

また、強制収容所では各国の子どもたちを使って生体実験が行われたという例がある。1944年6月初め、ハイスマイヤー医師はノイエンガンメ強制収容所で実験を開始した。ハイスマイヤーは、オーストリアの結核研究者クッチェラ＝アイヒベルゲン父子の理論「人為的に発生させた皮膚結核による重度肺結核の根治」を、実施にためしたがっていた。<sup>21)</sup>しかし、実験は失敗し、成人の囚人らなどの被験者たちは亡くなった。そこで彼は未だ扱っていない被験者グループとして子どもたちを要求した。子どもたちは全部で20人で、年齢は6歳から12歳までである。性別は男女10名ずつだった。しかし国籍は様々で、ポーランドは14名、フランスとオランダが2名ずつ、ユーゴスラヴィアとイタリアが1名ずつだった。<sup>22)</sup>この20人の子どもたちの扱われ方は、一驚に値する。囚人舎には暖房が入り、食事は充分とあってよいものだった。四人のポーランド看護婦が寝起きをともにし、一緒に歌を歌い、子どもたちを慰め、遊びを教えてやった。親が恋しいと言って泣く時は、子どもたちを腕の中に抱いてやった。親たちはもうこの世にいなかったのだが。<sup>23)</sup>その後ベルリンからの殺害命令により子どもたちは別の収容所へ移され首つるしにより全員殺害された。子どもたちには何一つ気がついていなかったのか特に抵抗は無かったようだ。これらのことから分かることは、強制収容所内で生体実験として特別に扱われた子どもたちに生き残った者はいなかったが、食事面やその扱いなどが他のユダヤ人よりも優遇されていたということだ。それには子どもへの同情という面も少なからずあるかもしれないが、実際は実験のための準備段階だった。囚人の中にはハイスマイヤーの実験の被験者は十分な食事が与えられるという噂を聞き、自ら志願する者もいたという。また戦後のハイスマイヤーは軍事法廷でこのようにも語っている。

「私にとって、人間と実験動物との間に原理的な区別はありませんでした。……（とってから訂正する）ユダヤ人と実験動物の間には。<sup>24)</sup>」

### 3. 潜伏生活を体験した子どもたち

ヨーロッパ西部の国々の中で、子どもたちが匿われたという事例は、オランダに限ったことではない。

イタリアでは「エムマ荘」があげられる。この建物には、1942年から43年にかけて約百人のユダヤ人の赤ん坊や子どもたちが住んでいた。これはあるレーカ・フレイエルとヨセフ・インディグという2人のシオニスト運動家の尽力によるものである。彼らは子供たちをイタリアの内陸部に連れて行くために当時、空き家になっていてモーデナ県の田園地帯の端にあり46室もある壮大なノナントラのエムマ荘を借りた。ローマの内務大臣は、この移住を承諾していたようだ。ここでの生活は、1943年7月にムッソリーニ体制が崩壊した時、犬を飼っていたほど生活に影響がなかったとされている。<sup>25)</sup>この「エムマ荘」には、21世紀になった現代でも当時の子どもたちが訪れているという。

一方、ローマに住んでいたマルコ・アナーヴは、1944年に家族とともにカトリック教徒の

友人のアパートに匿われたが、当時のことをこう語っている。「51歳になった今、あの頃を振り返ってみてははっきり言える。隠れ家での生活で何より耐えがたいのは自由がないことです」。「あの窒息するような感じ、今座っているこの部屋より狭い空間から出ることもできずに、くる日もくる日も同じ壁と向かい合って暮らすのです。部屋をノックする音がしたとする。それがトン、トンと2回で終わったら、というのはぼくらの間では3回叩くことになっていたからですが、『だれか来た!』というので、たちまち息を潜めていなくてはならない<sup>26)</sup>」。

フランスでは、パリのモスクでユダヤ人が匿われていた実例がある。レジスタンス活動の中心となったのは、モスクの指導者、シ・カドゥール・ベン・ガブリで、アルジェリア、モロッコ、フランスの3つの国籍をもち、この3つの世界でやすやすと動くことができた。(中略)1700人を超える人々が、モスク内や近くのアパートを仮の隠れ家としたと考えられている。ベン・ガブリは警報システムを作って、手入れがあったとき、身を寄せている人々がすばやく隠れることができるようにした。必要とあらば、通常男は入れない祈祷室の女性席にさえ招じ入れた。また、ユダヤ人の子どもをイスラム教徒と装うため、おびたしい数の偽出生証明書にサインした。<sup>27)</sup>これはユダヤ教以外の宗教組織が、その中でもイスラム教徒がユダヤ人の子どもたちを救っていたという極めて珍しいケースである。オランダを含め、ヨーロッパ西部の各国ではカトリックやプロテスタントのキリスト教徒がユダヤ人の子どもを匿うのに援助していたという話があるが、フランスの国内では、ユダヤ人救出をしたのはキリスト教のみではなかったことが分かる例である。

また、フランスでは他にもル・シャンボン・シュル・リニオン村で、5000人の村民からなる村が、ナチスに移送される直前にユダヤ人の孤児院から逃げてきた子どもたちの集団をかくまっていた事が確認されている。<sup>28)</sup>

イタリアやフランスはオランダに反して比較的犠牲者率が少ない国であったが、これらの国々でも潜伏生活をしていた例が少なからずあり、匿おうとする組織も存在していたことが分かった。しかし、それらがオランダでも子供たちの心情が多様多様であったように、全てが満足のいくものではなかったと確認できる。

## おわりに

オランダで潜伏生活をしていた子どもたちは、その戦争体験や戦後の生活から多くのトラウマを抱えるケースが多いことが分かった。

それには3つの原因が考えられる。一つ目は、子どもたちが潜伏生活をするために両親から引き離されてしまい、新たな帰属意識を強いられたこと。二つ目は、オランダにおけるユダヤ人の犠牲者やホロコーストへ送られた人数の多さから、必然的に子どもたちの両親もしくは片親が亡くなった場合が多く、以前のような生活に戻ることが困難であったこと。そして3つ目は、非ユダヤ系オランダ人官僚を初めとした国そのものが、国内のユダヤ人の救出に積極的ではなかった、もしくは出来なかったことだ。ヤーコプ・レンツのユダヤ人IDカードの例は、

明らかに非ユダヤ系オランダ人が、ユダヤ人の絶滅過程に積極的に貢献しているケースと言えよう。

また、オランダにいたユダヤ人のうち、8000人が密告によって逮捕されたとも言われている。<sup>29)</sup>

各国で比較した場合はどうだったか。ヒルバーグによると、一般に、西部地域におけるユダヤ人の受難の程度は、そこで行使されたドイツの支配力に応じて異なっていた。したがって、オランダのユダヤ人が最大の危険の中で暮らしており、他方、イタリアのユダヤ人が一番長く、最も安全な立場にいた。受難におけるこれらの地理的相違は、生き残った人びとの割合に見てとることができる。最小は明らかにオランダで、最大は、十中八、九、イタリアだった。受難のパターンは、オランダからベルギーへ、ベルギーとルクセンブルクからフランス北部へ、フランスの北部から南部へ、そしてフランス南部の中では、ドイツ支配地域からイタリアの支配地域で、といったユダヤ人の南方への逃亡にも、ある程度反映されていた。<sup>30)</sup>

子どもたちの潜伏生活については、フランスもイタリアも様々な抵抗組織によって潜伏生活が出来ていたことが分かったが、その子どもたちに与える心身的な影響はオランダと同様に人それぞれであった。また、あえて言うならば、フランスやイタリアはオランダに比べて抵抗運動がしやすい環境が元々あったのではないかということを感じられた。そのため、政策面だけに視点を置いてオランダがヨーロッパ西部地域の国の中でユダヤ人にとってユダヤ人迫害に積極的な国であったと、一概に判断できない。むしろドイツ軍に占領されるまでは、元々、中立を宣言していたのにも関わらず、国内ではユダヤ人に対する個人的な救出活動が活発だった方であるというのが今回の私の意見である。

そして問題は各国の人々の意識だけでなく、占領国または同盟国であるドイツの目線が多いか少ないかも重要な要素だったかもしれない。当時のフランスの場合は、ドイツを国際政治的な面で元々敵国とみなしていた。ベルギーの場合は、ドイツの認識ではフランスと同様「ロマンス地域」と考えられており、勝利したドイツによって、従属はしているが分離した地位に置かれることになっていた。それゆえ、ベルギーとフランスの占領は一時的なものと考えられており、隣国のオランダほど徹底的にアリア化する対象として認識されていなかった。そしてイタリアの場合は、当初は自主的に反ユダヤ人主義体制はとってはいたが次第にその勢いは衰えている。イタリアはドイツの同盟国であったためユダヤ人の迫害までは他国に比べ厳しく強制されることはなかった。

最後にユダヤ人の子どもたちについて研究したことで、共通している事は潜伏生活やホロコースト下のユダヤ人の子どもたちの苦難や苦痛は、出身国に関係なくどれも困難なものであり、一定の国で過ごしていたものだけが突出して不幸だったと決めることが出来ないということだ。犠牲者や収容所送りになった人々の数は数字で表現することが出来るが、潜伏生活やホロコースト下の体験で子どもたちが味わった苦痛は、数値化して比較することは困難である。収容所で行われた生体実験の例をみると、子どもたちの国籍はもはや関係なく実験体として平

等であり、その命を落としていった。絶滅過程を実行する側からすれば、収容所に入った時点で皆同じユダヤ人という括りになってしまうのだろう。

一方、潜伏生活を送ってきた子どもたちは、ホロコースト送りになった同じユダヤ人に比べその問題を比較的軽視されていた。しかし今回の調査で戦争が子どもたちに与えた影響が良くないものばかりだったのはとても理解できるが、それを覚悟して見知らぬ異教徒に自分の子どもたちを託したユダヤ人の両親たちの気持ちはもっと計り知れない。親たちの判断は、家族の形はどうであれとにかく子どもに生き残ってもらいたいという、子供を思う親としての苦渋の決断だったと考えられる。そして、それに協力した抵抗組織の人々の活躍を含め、これらの体験談は国を問わず、生き残るための希望を求め紛争した人々の努力を今も伝えている。

### 【註】

- 1) 長坂寿久『オランダを知るための60章』明石書店、2007年、p.307
- 2) ダイアン・ローレン・ウルフ、小岸昭・梅津真訳『「アンネ・フランク」を超えて—かくまわれたユダヤの子供達の証言』岩波書店、2011年、p.58
- 3) 同書、p.61
- 4) ウォルター・ラカー、井上茂子ほか訳『ホロコースト大事典』柏書房、2003年、p.131
- 5) ラウル・ヒルバーク、望田幸男・原田一美・井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』〈最新改訂版／上巻〉柏書房、1997年、p.445
- 6) 黒川万千代『アンネ・フランク：その15年の生涯』合同出版、2009年、p.42
- 7) 黒川『アンネ・フランク：その15年の生涯』、p.26
- 8) デボラ・ドワーク、芝健介訳『星をつけた子供たち』創元社、1999年、p.57
- 9) ウルフ『「アンネ・フランク」を超えて』p.128
- 10) マレク・アルテル、幸田礼雅訳『救出者—なぜユダヤ人を助けたか』日本放送出版協会、1997年、p.139
- 11) テオ・コステル、桜田直美訳『アンネ、わたしたちは老人になるまで生き延びられた。クラスメートたちがたどるアンネ・フランクの思い出』清流出版、2012年、p.47
- 12) ウルフ『「アンネ・フランク」を超えて』p.137
- 13) ドワーク『星をつけた子供たち』創元社、p.128-129
- 14) ウルフ『「アンネ・フランク」を超えて』p.152
- 15) 長坂『オランダを知るための60章』p.311
- 16) ウルフ『「アンネ・フランク」を超えて』p.111
- 17) 同書、p.304
- 18) ローレル・ホリディ、横山緝子訳『子どもたちのホロコースト』小学館、1997年、p.163
- 19) 同書、p.190
- 20) ルート・クリューガー、鈴木仁子訳『生きつづける』みすず書房、1997年、p.154
- 21) ギュンター・シュヴァルベルク、石井正人訳『子どもたちは泣いたか ナチズムと医学』大月書店、1993年、p.13
- 22) 同書、p.189-190
- 23) 同書、p.21
- 24) 同書、p.113
- 25) 岡田全弘「現代に生きるイタリアのレジスタンス ユダヤ人の子供たちの救出—ノナントラの

- 「エムマ荘」『人民の力』第845号、2006年、p.21
- 26) ドワーク『星をつけた子供たち』創元社、p.104
- 27) アネット・ハースコヴィッツ、池田真里訳「『この子たちは我が子も同じ』ユダヤ人をかくまっ  
たパリのモスク」『世界』743号、2005年、p.261-262
- 28) ラカー『ホロコースト大事典』p.209
- 29) 長坂『オランダを知るための60章』p.312
- 30) ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』p.432

#### 【参考文献】

- ダイアン・ローレン・ウルフ、小岸昭・梅津真訳『「アンネ・フランク」を超えて—かくまわれたユダヤの子供達の証言』岩波書店、2011年
- アナ・ノヴァク、山本浩司訳『14歳のアウシュヴィッツ 収容所を生き延びた少女の手記』白水社、2011年
- ローレル・ホリディ、横山緝子訳『子どもたちのホロコースト』小学館、1997